博士学位申請論文要旨

話し言葉における副詞「やはり」の多角的研究

LD192004　鈴木英子

本研究は，話し言葉における副詞「やはり」の多義性と，学習者と母語話者の使用実態を論じ，得られた知見を日本語教育へ応用することを目的としたものである。

副詞「やはり」の特徴は，母語話者の会話で多く用いられること，辞書的な意味の理解が産出に結び付く語と異なり，多義的であり中心的意味の他に派生した意味を持つこと，「やはり」「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」の 4 種類の異形態は一つの形態に統合されることなく並行して用いられていることが挙げられる。また，談話おいて副詞「やはり」を使用することにより，話し手は聞き手に自分の心情を推測させる手掛かりを布石として提示でき，聞き手は話し手の意向を推測する手掛かりとして活用できる側面を持っている。

従来の副詞「やはり」の研究の多くの考察は，母語話者研究者の内省・新聞・雑誌・小説・シナリオなどの用例によるものであり，書き言葉に近い用例からの調査・検討であった。本研究は，副詞「やはり」の複雑さの解明を学習者の産出から探るアプローチを取った。その理由は，話し言葉における副詞「やはり」の使用実態を明らかにすることができる，学習者の副詞「やはり」の理解と産出に内在している難しさの内実を探ることから副詞「やはり」の一側面に迫れる，学習者の産出という視点から見ることにより，母語話者が意識していない副詞「やはり」の側面を炙り出せると考えたからである。

現在，副詞「やはり」の研究は，形態的バリエーションや多様な意味・機能を中心に，母語話者の使用をめぐって議論が進む一方，日本語教育のための学習者の使用実態の調査は不足している。そこで，本研究では，複数の学習者コーパスを調査することによって，副詞「やはり」の学習者の使用実態を分析し，この調査結果を踏まえて，日本語教育への応用を検討した。

第 1 章では，上述した研究背景と問題意識を提示した。そして，発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つ副詞「やはり」を話し言葉のコーパスを用いて多角的に研究し，談話教育・日本語教育に資する知見を得るという研究目的を述べ，研究課題を以下

のように設定した。また，全 10 章から成る本論文の全体像を示した。

研究課題　1）副詞「やはり」の多様な意味・機能を包括的に記述できる枠組みとはどのようなもので，かつそうした枠組みから多様な意味・機能がどのように派生するか。（第３章）

研究課題　2）副詞「やはり」の異形態を母語話者はどのように使い分けているか。（第４章）

研究課題　3）学習者と母語話者の，副詞「やはり」の使用実態はどのようになっているか。

1. インタビューデータにおける学習者と母語話者の使用実態は，使用数，形態と出現位置，意味・機能の面からどのようになっているか。（第６章）
2. インタビューデータにおける学習者の使用の変化は，出現数，形態，意味・機能の面からどのようになっているか。（第７章）
3. 雑談データにおける学習者と母語話者の使用実態は，会話の属性，対話相手との関係の親疎でどのような異なりがあるか。（第８章）

第２章では，副詞「やはり」の蓄積された先行研究を概観した。まず，副詞「やはり」の副詞分類上の位置を確認し，次に副詞「やはり」の多様な意味・機能を検討した研究，談話における副詞の働きを論じた研究を検討した。その結果，先行研究で残された課題として，多様な意味・機能間の関係を考察した研究は不足していること，実証的データを用いた学習者・母語話者の使用実態の調査と検討は十分でないことの 2 点が存在することを理解した。

本研究の基礎的研究として位置する，第３章と第４章では，副詞「やはり」の多義性を論じ，母語話者の副詞「やはり」の異形態の使用実態を調査した。

第３章では，副詞「やはり」の多様な意味・機能を包括的に記述できる枠組みを検討し，次の 3 点を記述した。①副詞「やはり」のスキーマ的意味は「話し手の概念内の何らかのものと照合し，一致したことを表す」であり，副詞「やはり」が照合する「概念内の何らかのもの」の内実により異なった意味・機能が生じる。②副詞「やはり」は事実由来の認識と思考由来の認識の両領域に働く副詞であり，事実由来の「やはり」では話し手の原認識と対立認識に対する期待の強弱により，思考由来の「やはり」では，逡巡の度合いの強弱と判断過程のどの段階で発話するかにより異なった意味・機能となる。③前提命題との一致で説明できない「やはり」は，判断の過程も含めて表現される談話において，逡巡に重きが置かれた

結果，スキーマ的意味が希薄化したため生じる。

第４章では，副詞「やはり」の異形態を母語話者はどのように使い分けているかを『日本語日常会話コーパス：CEJC』を用いて調査した。副詞「やはり」を使用した人に焦点をあてた調査から，次の 4 点が観察された。①「やっぱり」は使用数だけでなく，使用した人数も対象者の 8 割で最も多い。「やっぱ」それに次いで全体では 7 割強の人が用いており，使用する世代も 10 代，20 代の人のみでなく全世代に渡っている。②副詞「やはり」の 4 つの形態のうち 1 形態のみを用いている人は全世代に渡り 4 割強存在する。③「やっぱり」と「やっぱ」の使い分けでは，「やっぱり」は一語文での出現が，「やっぱ」は節頭での出現が有意に多い。④「やっぱり」のアクセント型は中高型がデフォルトである。「やっぱ」のアクセント型は頭高型の出現が多い。

第５章から第８章は，学習者コーパスの調査・検討を行った。第５章では，調査に先立って本研究の方法，コーパスを用いた研究の意義と限界について言及し，調査対象とする３種類の学習者コーパスを概観した。第６章では，学習者と母語話者の使用実態の比較ができる『多言語母語の日本語学習者横断コーパス：I-JAS』のインタビューデータを用い，副詞「やはり」の使用数，形態，出現位置，意味・機能から見た使用実態を調査した。第７章では，『北京日本語学習者縦断コーパス：B-JAS』のインタビューデータを用い，副詞「やはり」の学習者の使用の変化を出現数，形態，意味・機能の面から調査した。第８章では，『BTSJ 日本語自然会話コーパス（2020 年版）：BTSJ』の雑談データを用い，会話の属性と対話相手との関係の親疎から，副詞「やはり」の学習者と母語話者の使用実態を調査した。

その結果，学習者の副詞「やはり」の使用について以下の点が明らかになった。「使用数」「形態」「出現位置」「意味・機能」の面から観察できた傾向と，調査に用いたコーパス名をまとめた。表 1 に示す。

表 1：学習者の副詞「やはり」の使用傾向と調査に用いたコーパス

観点	コーパス	使用傾向
使用数	I-JAS	・学習者は多用していない。
形態	I-JAS・B-JAS	・学習者は「やっぱり」「やはり」を多く使用している。
	I -JAS	・「やっぱ」の使用は母語話者との接触が関連している。

出現 位置	I-JAS・BTSJ I-JAS・B-JAS	・学習者は発話開始部で応答する際に用いている。 ・インタビューデータでは，副詞「やはり」に前後してフィラーが連続して出現することが散見される。
	BTSJ	・雑談データでは，発話開始部でフィラーと共起して出現する割合が，発話中間部，発話終了部より高い。
	I-JAS・BTSJ	・学習者が，発話中間部で複文で使用する際，逆接の接続表現に後接することは多いが，順接の接続表現に後接することは少ない。／・逆接の接続助詞が前置きとして用いられている使用は少ない。
	BTSJ	・学習者は，雑談データで発話終了部で後続の会話に吸収される副詞「やはり」の使用が少ない。／・接触場面の発話終了部での学習者の言い淀みは，コミュニケーションの挫折を防ぐため母語話者の発話に引き取られる
意味 ・ 機能	I-JAS・B-JAS ・BTSJ	・学習者は副詞「やはり」の複数の意味・機能では，限られた範囲での使用に留まっている。 「Ⅰ-1 依然として」「Ⅰ-2 同様に」「Ⅰ-3 同じ結果に帰結」での使用は少ない。／「Ⅱ 予期した通り」はインタビューデータでは出現しにくい。／「Ⅲ 熟考した結果」はインタビューデータでは発話開始部での使用が多い。／「Ⅳ 他の選択肢を排除」での使用は極めて少ない。／「Ⅴ 内容や表現を選択途中」は初級段階から用いられている。
その他	BTSJ	・接触場面で，学習者は「初対面会話」より「友人との会話」のほうが副詞「やはり」の出現率は高く，母語話者は逆に「初対面会話」のほうが「友人との会話」より副詞「やはり」の出現率が高い。
	I-JAS・B-JAS ・BTSJ	・調査したデータでは，副詞「やはり」の違和感のある産出やカチンとくる産出は少ない。

第９章では，本研究から得られた知見に基づいて，日本語教育への応用を検討した。本研究で設定した研究課題に対応した調査の結果と，学習者の使用傾向と学習者の使用教材の調査を踏まえ，日本語教育における副詞「やはり」の指導の時期・指導項目・提出順を以下のように提案した。①副詞「やはり」を発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つ副詞の一群の一つとして，学習者のレベルが中級後半から上級前半の段階で，談話

教育の一環として指導することを提案する。②指導項目と指導の手順は，副詞「やはり」を初級の後半に語彙として指導したあと，ⅰ）副詞「やはり」に多様な意味・機能が生じるメカニズムとⅱ）母語話者が副詞「やはり」を多用している理由➤ⅲ）副詞「やはり」の異形態を母語話者はどう使用しているか➤ⅳ）副詞「やはり」の談話での使用（多彩な表現効果）とⅴ）副詞「やはり」の談話での使用（注意が必要な用例）の順に指導することを提案する。提案内容を図 1 に示す。

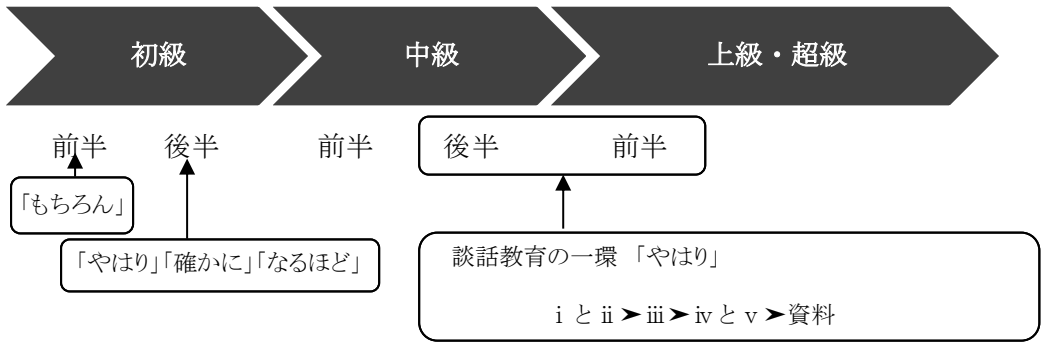

図 1：副詞「やはり」の指導の時期と指導順

第 10 章では，研究の概要と本研究で得られた結論を研究課題に従って述べ，本研究の意義と，本研究を通じて顕在化したさらなる問題意識を，今後の課題として記述した。本研究は，学習者コーパスと母語話者コーパスを用いて，話し言葉における副詞「やはり」を，意味論的観点・社会言語学的観点，第 2 言語習得の立場から社会言語学的観点・習得研究の観点・語用論の観点からアプローチする多角的研究を行った。

今後の課題として，本研究ではコーパスを用いた「定性的研究と定量的研究が相補的な関係となる」ことが体現できる研究を目指したが，コーパスの定量的調査から導かれる実態の記述に留まっていること，コーパスの調査を通じて抽出された個々の課題について，それが何に起因しているかを説明する理論究明のための定性的調査が必要であることを述べた。